



天霧城のお姫様

天霧城落城のあと、村々でこんなうわさがたちはじめました。「おーい、お城の焼け跡にお姫さまがいるらしい!」「なになに、お姫さまがのう!」「お姫さまは、長い髪を丁寧にとかしているというわ」「えっ、城には、だれもないはずだぞ」「いやいや、たしかに、見た者がいるんだ」「日暮れに山から帰っているとな、薄やみのなかで女が髪をとかしていたのだ。あれは、天霧城のお姫さまに違いない」「しかしなあ、お乳母^{ちち}さんも亡くなったと聞いたがな!」「いやいや、たしかにお姫さまじゃ」里人のうわさは、にぎやかなことです。でもこんな意見の人もいました。「おかしいぞ。あれは、姫さまじゃないわ。山の化けものかもしれないぞ!」「そうだ、そうだ。山の化けものだ」「化けものなら、退治してやる」元気のいい男が、化けものの正体を見てやろうと城跡^{しろあと}へ登ります。「おーい、やめとけ。お姫さまだったらどうする!」「お姫さまじゃない。この鉄砲が決着をつけてくれる」男は鉄砲の名人です。足ごしらえも、ものものしく城山へ登ります。

山の端に月が出ました。月の光に照らされ、くつきりと城跡が見渡せます。「あつ、いるいる」お姫さまが、長い髪をとかしています。月の光に、長い黒髪がねつとりとひかります。お姫さま、自慢の髪の毛なのでしょう。「けっこいお姫さまだなあ。こりゃ、ほんとうにお姫さまかもしれないぞ」男はお姫さまのお顔が見たいものと、後ろから一步二歩と近づきます。と、こうこうと照っていた月に雲がかかり、お姫さまの姿が見えなくなりました。「あれっ。おねらいを定めて、「ばあーんっ」と、撃ちました。手応えが、ありません。もう一度撃ちます。二発、三発、ねらったつもりですが全部はずれです。

「おかしいなあー」鉄砲の名人とと思っていたのに、今夜はさっぱりだめ。自信がなくなっていました。でも、男は気を取り直し、もう一度ねらいを定めます。「あれっ」お姫さまが、手に何か持っています。両手を合わせた中に、鉄砲の玉を持っているではありませんか。男が撃った弾丸です。

お姫さまは男が撃った弾丸を、まるで鞆たもとでも受け取るようにすんなりと手で受けていたのです。「ぎゃっ」男は恐ろしくなり、がたがた震え出しました。震えながら、男はあることに気づいたのです。「そうだ。怪しいのはあの鏡だ。鏡を撃ってやろう」お姫さまの前においてある丸い鏡に、ねらいをさだめて引き金を引きます。「とーん、がらんがらん、がらん」山の崩れるような大音響が、あたりを震わせます。男は立っていることができず、ほうようにして家まで逃げ帰りました。家へ帰り、ふとんをひっかけぶって朝まで震えていたそうです。

朝明るくなって、男はおそろおそろ天霧山を仰ぎ見ました。だって、昨夜の大音響、山が崩れてしまったのではないかと心配になったからです。「ああ、山は変わっていない。じゃ、あの大きな音は何だったのか」男は朝日のかげやく天霧山を見て安心しました。でも、おかしいなあと思ひ、男は山へ登りはじめました。昨夜、お姫さまが髪をとかしていたあたりへやってきましたが、お姫さまの姿はありません。「おかしいなあ、確かこのあたりにいらっしやったのに……。ありや、こりやなんだ！」岩の上に大きなものが倒れています。

おそろおそろ近寄って見ますと、おんびきが腹を見せてひっくり返っています。大きなおんびきの腹に、弾丸の跡が一発ついていたのです。男は自分の撃った鉄砲の弾であることを確かめました。鏡をねらって撃ったあの一発です。男は、大声を上げ走り出しました。「おーい、おーい。天霧城の化けものを退治したぞー。おんびきを撃ち殺したぞー」天霧城のお姫さまに化けていたのは、年をとった山のおんびきだったのです。

*おんびき……大きいひきがえる。がまがえる。



天霧城本丸跡